

# 太宰府の文化財

(311)

## 梅楽座跡

## 宰府四丁目

梅楽座とは、現在の太宰府天満宮幼稚園付近にあった芝居小屋で、大正6年(1917年)7月6日に完成していま



▲廻り舞台の礎石

座の舞台開き式三番、その後歌舞伎数番が演じられました。梅楽座の図面や写真などは残っていませんが、当時を知る人によると、建物は木造瓦葺の2階建てで、正面入口は南側を通る小道(現在は無い)に面していました。建物内部は、棧敷の正面に舞台が備えられ、両側に花道があり、2階にはコの字形に席があつて、現在熊本県山鹿市にある八千代座(山鹿市)に似た造りだつたようです。入口近くには貴賓席と検閲席があり、検閲席には警察官がいつも座つていて、客や舞台の中身を確認していました。

公演内容は歌舞伎、チャンバラ、現代芝居、無声映画、トーキー映画などがあり、無声映画では、横で弁士が喋っていました。さらに映画と劇が組み合わさつた連鎖劇と呼ばれるものもありました。また教育映画が上演される際には、御笠郡内の小学生たちが集まっていました。

興行がある日は、宮町通りに幟が立ち、昼頃にはチンド

ン屋や役者さんが刷り物を配りながら歩いていました。夕方6時になると天満宮境内から花火が上がっていたそうです。

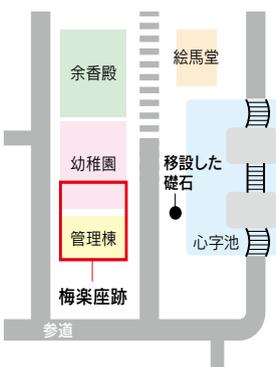
平成20年、太宰府天満宮幼稚園の建て替えに伴う発掘調査で、梅楽座の北側半分ほどが見つかりました。建物規模は、見つかった基礎から間口20m前後、奥行25m前後と推測され、現在の天満宮管理棟の位置まで建物があつたと考えられます。また、いわゆる奈落(劇場の花道や舞台の床下構造)も見つかり、廻り舞台のために地下に直径6.3m、深さ65cm程の円形の穴が掘られ、その中央には芯棒を支える礎石がありました。礎石の大きさは1.28m×0.7mで、その中心には一辺15cm、深さ5cmの方形ホゾ穴が彫り込まれています。その礎石の周りには芯棒を固定する支柱の礎石があり、さらにその外側には舞台の支柱の礎石が並んでいます。礎石の周りは土間で、北西に掘り下がった部分があり、舞台下にはそこから入つ

てきた可能性が考えられます。今回の遺構から舞台の規模は、間口13m前後、奥行7m前後であつたと推測されます。

梅楽座の入場状況は、昭和6年には興行日数が166日、興行数は235回で、入場者は2万9千960人あつたと記録されていますが、その後減少し、昭和12年には興行日数は44日、興行数は46回で、入場者は1万2千149人と記録されています。一度に300人近く収容していたことがわかります。

その後、どのような経緯かはわかりませんが、終戦を迎える前に取り壊されたと伝えられます。現在、廻り舞台の芯棒の礎石は、天満宮心字池の西側に移設され、見学することができます。

文化財課 宮崎 亮一



# 太宰府の文化財

(312)

## 宰府うつし 都市への憧憬

地方の歴史的な情緒のある町並みに「小京都」や「小江戸」といった言葉が使われることがあります。また、そう

いった景観などではなく、特定の都市の民俗文化が他の地方に伝わったり積極的に導入される現象をとらえた「ウツ



シ」という言葉も使われるようになり、博多祇園山笠を中心とする博多文化の影響を「ハカタウツシ」と表現されることがあります。ウツシの文化とは都市の外観や習俗、その賑わいが魅力を生じて、他所の人をしてそれを我がまちに写し(移し)たい、という人々の願望の現れといえます。

太宰府のうそ替えの行事は太宰府天満宮で毎年1月7日に行なわれる恒例の行事で、前年についた嘘を天神さまの誠と交換するということで、木彫りの鳥「鶯」を暗闇で人々が交換します。戦後すぐまでは「女子や子どもは近づくな」といわれるほどの荒い行事で、群衆が金の当たる木うそ目当てに押し合いへし合いして奪い合い、もみ合いする上には湯気が立ち上って見えたそうです。

この行事に引き続いて「鬼すべ」と呼ばれる追難の行事が行われてきたことから、うそ替えは本来、寺院で行なわれた「修正会」(正月に修する儀式)と呼ばれる新年の懺悔

の儀式が、形を変えて民間の行事になったものと考えられます。修正会は礼仏して前年の自らの罪過を懺悔する「悔過」と呼ばれる行事で、「うそ」を替える行為はここから来ているようです。また、悪を祓う行為が闇に潜む鬼を火であぶり出して追い払う行事として表現され、久留米の大善寺や大分国東の岩屋寺などでも火祭りや鬼払いの行事で残されています。太宰府天満宮で、

このような仏教行事が形を変えて民間信仰として残った背景には、江戸時代まで太宰府天満宮が安楽寺という天台宗の寺院と一体で運営されていた歴史的な背景があります。

うそ替えの行事は、遠くは江戸亀戸天満宮(東京都江東区)、京都北野天満宮、大阪天満宮などでも行われていますが、天保11年(1840年)に山崎美成が書いた『三養雑記』という書物には、文政2年(1819年)に大阪の天満神社が、翌年には江戸の亀戸天神で「宰府」ならびてこの神事をはじめ「世に

あまねく知ること」になつて「筑紫の太宰府」のうそ替えを各所で写したとあります。江戸後期には宰府のうそ替えのにぎわいが全国の天神社にとつて憧憬を抱かせるものであつたことを伝えていきます。

現在では、天満宮以外でも福岡市博多区の住吉神社や前原市老松神社などで盛大にうそ替えが行なわれています。住吉神社ではうそ替えに先立つて鬼すべも行なわれており、まさに現代の「宰府うつし」といえる行事になっています。

文化財課 山村 信榮



# 太宰府の文化財

313

## 市民図書館建設を实らせた 地域の活動



ども会でした。

昭和61年11月、太宰府市民  
待望の市民図書館が開館しま  
した。今年で25年の歳月を経  
ることになります。多くの市  
民の皆さまに活用いただいて  
いる市民図書館、この図書館  
が開館するまでには、市民の  
熱き思いと活動がありました。

昭和49年春、東ヶ丘区で小  
さな活動が始まりました。そ  
れは、子ども達のたまり場の  
ような場所をつくろうという  
ことで、有志が集まり「子供  
文庫」の活動が始められたの  
です。はじめは、できること  
を持ち寄ることからはじまっ  
たといわれています。各々の  
家を持ち回りで解放し、本も  
各々の持ち回りで始められま  
した。その半年後、福岡県が  
当時推進していた西日本鉄道  
株式会社の廃バス利用制度を  
活用し、昭和50年10月に市内  
では3番目となる「バス文庫」  
が東ヶ丘区にある中央公園に  
開館することとなりました。

当時、公園は十分な整備が進  
まず、小石が散乱する場所だっ  
たのです。ここでも、小石転  
がる公園を整備したのは、子  
ども会でした。

「バス文庫」になってからは、  
利用する子ども達も増え、本  
を読みに来る子、バスの名残  
を求めて来る子など、様々  
な目的で集うようになり、当  
初の目的であった「たまり場」  
が次第に姿を現すようになり  
ました。当時の苦労話として、  
夏の日照り、雨漏りなどの  
戦いの日々であったと聞いて  
います。昭和54年1月には、東ヶ  
丘公民館が開館し、「バス文庫」  
もその中に入り、次第に充実  
したものになっていきました。

市内でも同じような活動が  
活発になり、文庫連絡協議会  
が設立され、市民の横の連携  
も広がっていったのです。こ  
の文庫連絡協議会を中心に起  
こした図書館を作る運動が実  
を結び、ついに市民図書館が  
開館しました。

その後、社会の流れが変わ  
り、平成8年には東ヶ丘区の  
子ども達を育てた「子供文庫」  
の歴史は幕を閉じます。今、こ  
の「子供文庫」の歴史を綴った  
本が、太宰府東小学校に布の  
絵本として寄贈されています。

今回紹介した地域の歴史は、  
文化遺産調査ボランティア東ヶ  
丘班の皆さまが集められた情  
報の一部です。始まりは小さ  
な活動であった「子供文庫」が、  
地域の皆さんの「できること  
を持ち寄る」取り組みから大  
きく花開き、市民図書館開館  
へと進んでいった歴史です。

文化遺産調査ボランティア  
の皆さんの活動によって、古  
いものだけではなく「今」を記  
録する取り組みも進められて  
います。「今」も将来は過去に  
なります。今行われている地  
域の地道な活動にも光を当て、  
記録していく取り組みも進め  
ています。これも、未来の太宰  
府市民に伝えたいモノ、出来事  
のひとつではないでしょうか。

文化財課 中島恒次郎

### 文化財から文化遺産へ

太宰府市では、未来の市民に  
守り伝えていく素材を文化財か  
ら裾野を広げ、市民が大切に思  
う文化遺産の考え方からはじめ  
る取り組みを開始しました。今  
紹介した記録も、「今」を伝え  
る取り組みとして調査された成  
果の一部です。

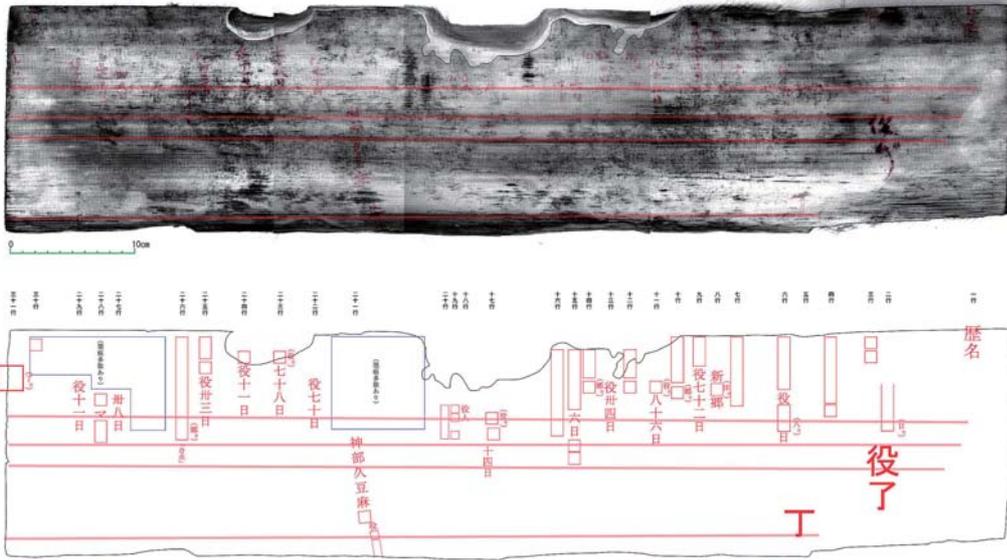
この広報紙は再生紙  
を利用しています。

# 太宰府の文化財

314

## 歴名木簡

大宰府条坊跡出土(朱雀三丁目) 奈良時代



※ゴシック体は異なる筆づかいの字。書いた人が違うことがわかります。  
横線は文字の高さをそろえるための罫線とみられます。

日本人がはじめて文字にふれたことがわかるのは、弥生時代のことで、たゞ、文字を駆使する時代がおとずれるのは、今から1300年前ほど前の飛鳥・奈良時代になってからでした。この当時、紙はたいへん貴重だったため、文書のやりとりの多くは板や木ぎれに墨書したものを使っていました。このようなものを木簡といひます。

紙文書と同様の文書形式をとっている珍しいものです。文頭(右上)には「歴名」と記されていますが、歴名とは名前を連ねた文書、つまり名簿のことです。よく見ると「歴」字の上半分は切れているため、板の上側は切断されていることがわかります。このため名簿のタイトルや並んでいたであろう人名は全て失われていす。なお板の左端でも同様に文字が切れていますので、さらに左側へと文字が続いていたこともうかがえます。

さて、板上の墨書はほとんどかすれていましたが、特殊なカメラで見ると、31行推定127文字程度にわたって文字が並んでおり、「役」という文字と日数、また「郷」という地名にかかわる文字が繰り返し書かれています。つまりこれは「労役」すなわち労働に関わった人びとの名簿で、中には「新田郷」という薩摩国高城郡(鹿児島県薩摩川内市)の郷名(地名)もみられることから、ここに記されたのは西海道一円から集められた人々だったと推察されます。労役の日数は2〜3カ月に及ぶものがあります。これは租庸調制度の庸税として年10日(労役)ではなく、「雇役」(有償労働)もしくは「任丁」(3年間雑役に従事)に関わるものとみられ、大掛かりな事業が行われていたことがうかがえます。なお文頭(右下)には、大きな文字で「役了」(労役が終了した)と書かれています。これは労役終了時に管理者が記したものです。おそらくこの木簡は労役の現場近くに置かれていたのでしょう。

こうした木簡は、大宰府政庁周辺からの出土なら十分わかります。ところがこれは、大宰府条坊跡の中心部、西鉄二日市駅北側の操車場跡地から一昨年出土したものです。ここでは奈良時代の大型建物や希少な遺物の数々が見つかっています。この木簡によって、大宰府にかかわる重要な施設がここにあったことが、あらためて裏付けられました。

文化財課 井上信正

この広報紙は再生紙を利用してあります。

# 太宰府の文化財

315

## 御神牛像雛型

富永朝堂作



太宰府天満宮の参道をまっすぐ進むと、突き当たりに延寿王院（宮司邸）があります。この延寿王院前には御神牛の像は観光ルート沿いで目立つこともあり、観光客、特に外国の人にとっても人気があります。この像の作者は富永朝堂という彫刻家です。富永朝堂は昨年1月30日に行われた第1回太宰府市景観・市民遺産会議で市民遺産第4号『芸術家 富永朝堂』として認定されました。今回紹介するのは、その天満宮御神牛像の原型として制作された「御神牛像雛型」です。

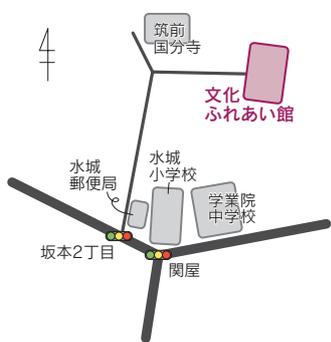
富永朝堂は明治30年に博多赤間町で生まれました。大正4年に上京し、同じ博多出身の彫刻家山崎朝雲に弟子入りしました。山崎朝雲は高村光雲の弟子で、博多東公園の亀山上皇像の原型を制作したことで有名です。8年間に及ぶ厳しい修行を無事に終えた朝堂は木彫り彫刻の本道を身につけて、帝展に連続入選するほどの腕前になりました。その後、太平洋戦争が激化するなかで、昭和19年に東京から太宰府に疎開し、観世音寺の西側、政庁月山の南裾に当たる場所（古民家を修繕した「吐月齋」というアトリエ兼住処を構えました。以後、久留米出身で八女にアトリエを構えた画家の坂本繁二郎と志を同じくし、中央の芸術界にあえて迎合せず、地方から作品を送り出す芸術の大家となりました。太宰府の文化と自然を愛した朝堂は、昭和62年、太宰府の地で満90歳の天寿を全うしました。

さて、太宰府天満宮からこの御神牛像制作の依頼を受けたとき、朝堂は87歳でした。像のイメージを固めるために基山町をはじめとして各地の牛を見に行くなどし、取材に2カ月を要しました。また、取材帰りに見た宝満山の山並みの力感や柔らかい稜線を牛の背中のラインと合わせるアイデアも盛り込まれました。作成された像は高さ20cm、長さ52cmとなり、丸みを帯びた胴体のどっしりとした肉感と、

なんといえない優しい眼差しをしていきます。この原型は油粘土で作られており、これを型取りしてブロンズ像にします。この御神牛像雛型は富永朝堂の長男敦夫氏から太宰府市に寄贈されたもので、普段は市長室にあります。雛型を3倍に拡大して制作されたのが冒頭にも触れた延寿王院前の御神牛です。

この雛型は普段なかなか見ることができませんが、現在文化ふれあい館で開催中の「市民遺産展『芸術家 富永朝堂』のコーナー」に展示しています。この「市民遺産展」の会期は8月28日（日）（月曜日は休館）までです。入場は無料ですので皆さんぜひご覧ください。

文化財課 高橋 学



# 太宰府の文化財

314

## 八朔の千燈明

(太宰府市民遺産第2号)



▲昭和60年の八朔の千燈明 (八尋千世氏所蔵)

毎年9月1日の夜、五条区の人たちだけで太宰府天満宮に献燈をする「八朔の千燈明」という行事が行なわれています。この行事の由来は、江戸時代後期にさかのぼります。当時太宰府で疫病が流行り、困った五条の人々が太宰府天満宮に願立ををしたところ、患う人が出なくなつたそうです。そのお礼として、八朔(旧暦の8月1日)に太宰府天満宮に千燈明を献ずるようになったといひます。

行事の主な流れは次のとおりです。夕暮れどきに五条公民館に集まり、昔のさいふ参りの道を通つて天満宮へ向かいます。天満宮では当直の神職から本殿前でお祓いを受け、拜殿の御神燈をいただき、午後8時頃、いただいた御神燈の火を、並べているロウソクに灯し、火が灯っている間お参りをします。かつて五条の人々を疫病から救つてもらつたことへの感謝の気持ちと共に、現在・今後の五条区の住民の疫病除けを願つて今も続けられています。

### 五條区青年会の金銭出納簿

(五条公民館所蔵)

八朔の千燈明のためにロウソクや針金を購入したことが記録されています。

※内容は、太宰府市史資料室で画像データを閲覧できます。



▲平成20年の八朔の千燈明のようす

点灯の前に、自治会長から子どもたちへ、行事の由来が語られます。

戦前、八朔の千燈明は五条区の一大大行事だったそうです。行事の主な担い手は、区の青年団(五條区青年会)でした。当時は、太宰府天満宮で毎年9月25日に行なわれる千燈明と同様に、大鼓橋と心字池の周囲で献燈が行なわれていました。青年団の面々が、事前の竹伐りや材料の購入、当日の設営作業、行事の執り行い、撤収まで、八朔の千燈明に関わるあらゆる事を取り仕切りました。

戦時中から戦後しばらくの間、行事は途絶えますが、昭和38年に当時の五条区長の提案で、復活します。戦前よりも規模は縮小しましたが、場所を太鼓橋から楼門前の方に移して、今日までの約半世紀、続けられています。今では地元の子ども会も加わつて、五条の夏の終わりの風物詩となっています。

この「八朔の千燈明」は今年1月に行なわれた第1回太宰府市景観・市民遺産会議で、太宰府市民遺産第2号として認定されました。紹介のパンフレットが五条公民館で配布されています。

文化財課 遠藤 茜

# 太宰府の文化財

317

## 滑石製屋蓋

朱雀2丁目出土



この屋蓋の破片は、現在西鉄二日市操車場跡で行われている大宰府条坊跡の発掘調査で見つかったものです。西鉄二日市駅の近くの、9世紀中頃後半に埋没した井戸で出土しました。屋蓋とは屋根のことで、この破片は屋根の隅棟部分です。大きさは19.8cm×14.0cm、高さ5.8cm。石材は淡い緑色を帯びた滑石製で、爪でも傷を付けることができ、ほどの削りやすいものを用いています。

詳細を観察していくと、屋根は緩い傾斜で作られています。外側には約1cm間隔で溝を彫り、断面台形状に丸瓦を表現しています。しかし、瓦一枚ごとを表現した削り出しはなく、平瓦の表現もまったくありません。また、軒先瓦の表現もまったくなく、平坦に仕上げられています。

屋根の降棟には3段の段差が作られており、鬼瓦を模したものと考えられます。裏側は屋根と同じく約1cm間隔で溝を彫り平行する垂木を表現しています。先端部分には径



表面



裏面

0.4cm、深さ1cmの円孔が彫られており、風鐸などを嵌め込んでいたと推測されます。垂木の内側に彫られている桁のような部分には1.9cm間隔で刻み目が施されています。

この遺物以外に同様の破片は出土していないため、全体の形や大きさなどを復元することは困難です。しかし、東日本を中心に出土している瓦塔（粘土から作り上げ焼かれた小型の塔）から推測すると、これも小型のお堂もしくは塔の一部と考えられます。瓦塔は九州では十数例しか出土していないように、滑石製のものにはさらに珍しいものです。

制作年代は8世紀後半〜9世紀前半頃のものが多く、この屋蓋もほぼ同時期のものと推測されます。

瓦塔は生産地のほか寺院や集落で出土する例が多く、それらの信仰や祭祀に関連して作られたものと考えられます。この滑石製屋蓋も、出土した操車場跡地の東側丘陵上には般若寺跡があり、また操車場跡地では奈良時代の大型建物群などが確認されていることもあり、それらと関連のある遺物と推測されます。

文化財課 宮崎 亮一

# 太宰府の文化財

318

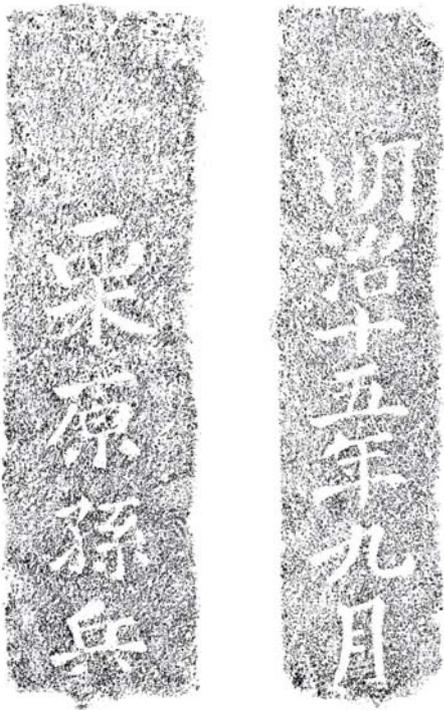
## 「シメ立」の石柱 — 交差点と結界 —

昨年、筑陽学園の西側の駐車場で高さ1m、幅15cmほどの花崗岩製の石柱が土中から発見されましたが、大切なものとは判らず、しばらくこの土地の中で放置されていました。

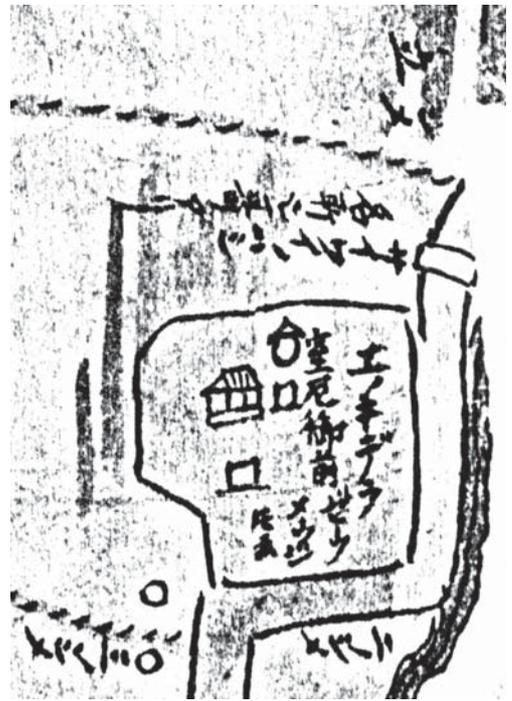
この石柱をよく観察すると、背中合わせの2つの面に文字が彫り込んでありました。泥を払って現れた文字を見ると、片面に「栗原孫兵」、もう片方の面に「明治十五年九月」とあり

ました。拓本を取るとそれにより鮮明に読み取れます。

栗原孫兵は太宰府天満宮参道にある「松屋」の当主の名です。幕末から明治初期の「松屋」は、薩摩藩の定宿で知られる参道でも屈指の旅館でした。孫兵は勤王の志が厚く、志士に従って京都まで行き来していたようです。石柱にある「孫兵」はその子であるようです（親子2代で同名）。



▲栗原孫兵碑(名前側) ▲栗原孫兵碑(年号側)



▲旧蹟全図のエノキデラ



明治十五年は太宰府神社と なった天満宮が7月に官幣小社になった記念の年です。9月是天満宮の最大行事である御神幸祭があり、道真公の御霊を載せた御輿が「どんかんみち」を通って榎社(榎寺)までやってきます。この石柱はこの道際に埋まっていたようです。江戸時代後期に描かれた太宰府の土地の名前や由緒を細かく記載した一級資料である『太宰府旧跡全図(北図)』

には、石柱の出た榎寺の北に 当たる場所に「シメ立」の記載 があります(図右上)。さらに 榎寺の東側に「二ノシメ」(図右 下)、南西に延びる道に「三ノシメ」(図左下)と描かれてい ます。「三ノシメ」には道の両 脇に白丸があることから、こ のシメとはしめ縄を張る位置 を示し、しめ縄は道をまたぐ ように張られていたことがわ かります。このことから、筑 陽学園の西側で発見された石 柱はしめ縄を張るための竿を くりつけたものであったと 考えられ、それを明治15(1 882)年9月に栗原孫兵が 奉納したものと思われます。

この「シメ立」の位置は、近 年の発掘調査で判明した古代 の朱雀大路と左郭9条の道路 が交差する位置にあたり、「二ノシメ」は朱雀大路と右郭12 条の、「三ノシメ」は右郭1坊 路と12条路の交差点に近い位 置にあたります。古代の交差 点は「チマタ」と呼ばれ、幸 いと災いが交差する場所と考 えられ、まじないが行われた りお堂が建てられたりした場 所です。天満宮にとって大事 な祭祀が行われた榎社に近い 古代の交差点の場所に、しめ 縄が張られてきたことは、無 意識とはいえ古代とのつなが りを強く感じさせることです。 ここにまた太宰府の歴史の深 さを感じ取れます。

文化財課 山村 信榮

# 太宰府の文化財

319

## 注連縄飾りしめなわ

師走になり、今年もあとわずかになりました。平成23年という年は、3月11日の東日本大震災に日本中が揺れ動き、そして人と人の「絆」が固く結ばれた年でした。

一年の無事に感謝し、新しい年を迎えるために、古くから日本の家々では注連縄飾りが門や玄関に飾られます。市内には、自らの田で育てた稲わらを使い、師走のこの時期



▲吉松宝満宮・八幡宮の注連縄なわ作り

に自らの手でなわ注連縄なわの作業を行っている家もあります。日常の生活の中にはハレとケと呼称される行いが繰り返されており、「ケ」は日常の行いを、「ハレ」は特別な行為を表します。新年を迎えるために作られる注連縄は、「ハレ」の行事のためのものひとつです。通常、日常用具の縄なわの作業は、右廻りになわわられますが、「ハレ」の行事である注連縄は、日常とは異なる世界を意識し、左廻りのなわの方が行われます。新年を前にし、神様を迎えるなわ代として注連縄はつくられます。

注連縄は本来、神域と現世を隔てる境界の役割を果たしていました。鳥居に掲げられている姿は、市内のお宮に見ることができません。市内のお宮の多くは、一年の無病息災、豊作の御礼として毎年十月に行われる宮座と呼ばれる行事の際に、新しくつくり代えられています。文化遺産調査ボランティアの調査によって、一口に注連縄といってもお宮ごとにそのつくり方や姿が異



▲吉松宝満宮・八幡宮の注連縄

なっていることが分かってきています。素材、作り手、姿へのこだわりが、地域の個性として表現されているのです。また、文化ふれあい館が中心となつて、市内の注連縄つくりの技術に関する記録作業を進めています。水城十社と呼ばれる旧水城村の神社の注連縄つくりについて、注連縄つくりの「今」を記録し、むかしとの違い、地域の違いを記録しようとしています。これは「今」の担い手の方々の技術に裏付けられた地域ごとの個性と伝統の記録であり、太宰府の個性のひとつ一つの記



▲坂本八幡宮の注連縄

録です。様々な思いで飾る注連縄飾り。どうか新年の1月7日には、多くの方々によって支えられ集う「ほんげんぎょう」(どんど焼き)の行事で、正月に飾った注連縄を焼いて、一年の無病息災をご祈願ください。「ほんげんぎょう」に集うことで、新たな年に、新たな人と人とのつながりが生まれるかもしれません。

文化財課 中島恒次郎

# 太宰府の文化財

320

## 奈良三彩

### 西鉄操車場跡出土 奈良時代

表面を色鮮やかに彩った焼き物は、私たちの目を楽しませてくれます。ましてや素焼きの土器が主流だった時代の人々にとつては、いかばかりだったでしょうか。

7世紀後半(飛鳥時代)、鉛を含む釉薬をかけた色とりどりの焼き物(鉛釉陶)が大陸から伝わってきました。朝鮮半島新羅からは緑・茶・白色の単色で彩られた陶器が、また中国唐からは「唐三彩」という三色の釉薬がかけられた陶器もたらされました。この後、鉾山開発によつて金属生産が可能となったことをきっかけに、国内でも鉛釉陶生産、また鉛釉技術を活かしたガラス生産が始まったと考えられています。

奈良時代の国産鉛釉陶器は、総じて「奈良三彩」と呼ばれ

ます。奈良三彩は、一般に緑・黄・白色の三彩、緑・白色、緑・黄色の二彩、それぞれ一色を用いた単彩がありますが、単彩は数が少なく、ほとんどが二彩・三彩です。

種類は壺・甕・瓶・鉢・盤・椀・皿・杯、このほか特殊品として瓦・香炉・火舎・甕・釜・硯・塔・鼓の胴・枕・蔵骨器などが知られています。これらは官衙(役所)・寺院・墳墓・祭祀遺跡・邸宅・住居等から出土しています。その事例は稀なことです。そうした数少ない中でも圧倒的に数が多いのは、祭祀遺跡などで出土する手のひらサイズの小型壺です。言いかえれば、小型壺以外の出土例がいかに希少かということ。寺院跡から出土する奈良三彩は、奈良の東大寺正倉院で儀式用の調度

品として伝世していることから、その用途は主に儀式具だったと考えられています。このほか貴族の邸宅出土例もあり、奢侈品(贅沢品)だったことは間違いありません。

太宰府市内では、これまでも観世音寺・般若寺跡・宝満山で出土していますが、写真は大宰府条坊跡ほぼ中央部、西鉄操車場跡地の発掘調査で新しく見つかったものです。

上の写真は盤(洗面器のような形)に細く高い脚が付いた香炉(火舎)の口縁の一部です。剥げずに残った釉薬に緑・茶色が見えます。下の写真は、緑・

黄色の釉薬がかかった壺の胴部破片です。

西鉄操車場跡地からは奈良三彩だけでなく、高級食器として知られる佐波理(新羅製の金属食器)も見つかっています。いずれも全国的には大

寺院跡などからの出土が知られていますが、ここの調査で見つかった遺構は寺院跡ではありませんでした。

奈良時代、ここには大宰府の中でも最大級でしかも格調高い建物が、政庁に通じる朱雀大路側を向いて建ち並んでいたことが明らかとなっています。その規模から見ても大

宰府に深く関わる公的な施設だったと推測され、出土した佐波理・奈良三彩はここで使われ、この場所を象徴するような物品だったことが十分考えられます。

市では、この遺跡の性格について調査研究を進めてきましたが、先月、奈良時代の客館跡として公表いたしました。この奈良三彩も、大宰府に來た外国使節を迎え、もてなすために使われた品々の一つだったことが想像されます。

文化財課 井上 信正



▲奈良三彩火舎の外表面



▲奈良三彩壺の外表面